

「馬場塾の最新胃 X 線検査法」

馬場 保昌 編集
佐藤 清二・富樫 聖子 執筆
坂東 孝一・松本 史樹

半田内科医会名誉会長 新海内科院長

新 海 眞 行

上部消化管 X 線検査に励む医師、放射線技師にとって最良の教科書が馬場塾の放射線技師の筆により、馬場保昌先生の解説を加えて、発行された。

撮影 X 線装置の開発と高濃度造影剤の開発によって、微細な粘膜面がコントラストの良い鮮鋭な画像として得られている。二重造影の利点を十分に生かし、体位変換手技を工夫することによって、その欠点とされていた造影剤の付着不良や小腸流出に伴う読影不能領域の増大などの問題が大幅に減少した。ここに、今なお胃 X 線検査は健在であることを証明してくれた。馬場先生の情熱と地道な努力、弟子の指導は見事であるが、名人芸とか達人として別扱いしてはしくない。

本書を読み、素直にその指示に従えば、胃 X 線検査に情熱をもつ医師は、胃 X 線検査の重要性を納得するはずである。内視鏡のみで胃疾患診断を行っている医師にとっても一読に値する書である。

というのも、内視鏡で見逃した症例を知ることによって、X 線は内視鏡とともに、胃疾患診断学の車の両輪と、改めて知ることになると思うからである。

馬場保昌先生の胃 X 線精密検査の見学に、東海地区からも多くの若い消化器医、放射線技師を送り出してきた。最新胃 X 線検査法を試みる検診センターでもはじめています。

発泡剤で胃を膨らませると、数分間、胃の蠕動は少なくなり、検査を行う際に、受診者の緊張をとり、楽

に体位変換してもらうのも、撮影者の技術である。読影しやすい整った X 線写真を撮影できる検査者は、受診者にやさしい会話で、リラックスさせ胃の緊張もとれ、決して乱暴な発言はしないものだと思えるのは教えられると帰ってくる。

高濃度低粘度造影剤の開発と撮影装置や機器の改良・開発によって、二重造影法の利点を十分に引き出すことが可能となった。馬場先生が指摘されるように、今後の電子工学技術の進歩と相俟って、消化管 X 線造影検査の特異性と有用性が、再認識される時代がいずれ訪れるに違いない。胃 X 線検査を行う機会もなく、胃疾患診断を内視鏡のみで行うことになった消化器医も、本書を読み、その指示に従って透視撮影を行えば、診断力とその視野の幅を広げ、内視鏡診断の質的向上につながる可能性もある。

胃 X 線検査診断の上達を望む医師、放射線技師には、本書は必携の書物である。

読んで理解できないところは、消化管専門医の教えを乞えばいい。私自身も 2002 年 3 月下旬には中国で、消化管診断に関心をもつ医師たちに、早期胃癌の X 線診断を講演する機会を得た。本書を中国に紹介できる好機に恵まれ、日中友好に貢献できたことと喜んでいる。

故白壁彦夫先生は、胃 X 線二重造影法を開発・普及され、熊倉賢二先生による腹臥位二重造影法の完成をみた。昭和 40 年代に、X 線二重造影の全盛期を迎え、その後、X

線と内視鏡との共存時代を経て、今日、内視鏡中心の時代が訪れている。胃 X 線検査と診断読影の質的低下に悩んでいる消化器医や、内視鏡万能と思いつ込んで消化器医に、馬場先生は、新しい胃 X 線検査法の開発と手技の工夫による X 線二重造影像を、本書に紹介し、現状に警鐘を鳴らし、新風を吹き込んでくれた。その勇気と自信に、敬意を表する。

故白壁先生は、晩年、全国各地に散在する胃 X 線検査診断の達人が、天然記念物的存在とならぬように願うと述べておられた。1994 年夏のことである。

21 世紀に入って、胃 X 線診断学の再構築をめざす馬場塾の最新胃 X 線検査法の誕生に、天国から、「胃 X 線診断学は不滅である。馬場保昌君、ありがとう！」との白壁彦夫先生の喜びの声が聞こえてくるような気がする。

今なお胃 X 線診断を愛し、天然記念物的存在となっていない胃 X 線診断専門医が指導医となり、全国各地で普及活動が続けていけば、胃 X 線診断の黄金時代が訪れそうな予感がする。

本書は、消化器医はもちろんのこと、放射線技師、研修医、医学生にも、ぜひ読んでいただきたい待望の好书である。

● B5 頁 228 図 23 写真 592
色図 1 表 26 2001 定価 (本体
4,700 円 + 税) 送料実費

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)